

鹿児島の昆虫 67

変な標本・昆虫

昆虫担当 中峯 敦子

1 昆虫標本が果たす役割

日本の昆虫は、3万2000種あまりが知られ、わたしたちが最も身近に観察できる野生動物です。それゆえに食糧、医薬品、工業製品の生産・製造に昆虫を応用するいわゆる「バイオテクノロジー」や昆虫のもつ機能や構造を模倣し工業的に利用する「バイオミメティクス」など多岐にわたる研究が行われ、すでにわたしたちの生活に役立っています。

これらの研究では、利用する昆虫を採取して、目的に応じて適切な形で標本化し、整理・保存したものを研究材料にしています。あなたが「こんなものまで?」「こんな形で?」と思う標本にも、製作者や研究者の意図があるのです。

2 博物館で一番古い標本

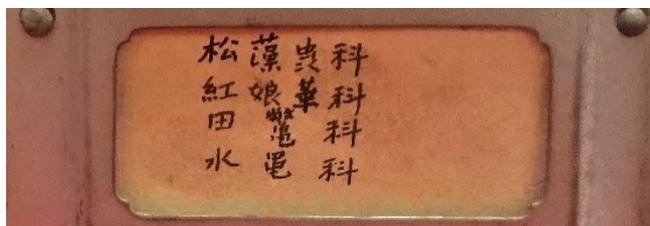
さて、博物館の使命の一つに、資料の収集や保存・保管があります。鹿児島県立博物館には65,000点あまりの昆虫標本が収蔵されています。今回は、おそらく県内でも一番古い標本を御紹介します。標本箱は、木（おそらく桐）製でガラスのふたがついています。側面に金属の取っ手がついておりレトロな印象を与えます。

中の標本には、手書きのラベルがついています。これを見ると1926年（大正15年・昭和元年）あるいは1927年（昭和2年）とあり、今から約95年前の標本であることが分かります。ちなみに現在の博物館本館（旧図書館）の建物が竣工落成されたのもこの頃です。



約95年前の標本箱

3 標本が語ること



標本箱のタイトル

標本箱の側面にあるタイトルには見慣れぬ文字が並びます。鳳蝶科（現在のアゲハチョウ科）、金亀子科（コガネムシ科）、埋葬虫科（シテムシ科）、椿象虫科（カメムシ科）、紅娘草科（テントウムシ科）など。現在は科名や種名がカタカナ表記なので、すべて漢字で書かれていると、さてどんな虫だろうと一瞬戸惑います。



上荒田にいた希少種・タガメ

標本の中に現在では希少種となったタガメがありました。ラベルを見ると、鹿児島市上荒田町にいたことが分かります。現在の鹿児島市立病院があるあたりは、かつては水が豊富で、タガメの餌になるカエルや小魚が生息する用水路や田んぼが広がっていたと推測できます。

戦火を潜り抜け、収蔵庫に在り続けるこれらの標本は、失われた鹿児島の自然や現在に至る昆虫分類学の歴史を静かに語ります。